

金曜四限 哲学 I

担当教員 植村恒一郎

専門 カント、時間論

t-uemura@vmail.plala.or.jp

植村教授のメールアドレス。授業後にメールでの質問可。ただし所属(大学名、科類等)を明記すること。

NHK 番組『Q』に出演。

教授の哲学的立場

「自由であること、自由になること」とは何か、についての探求。
本来見えない、あるいは見えにくい「自我に近いもの」を見えるようにすること。

授業の要望

対象への理解の実現度を高くする。

「実現度を高くする」とは、その対象へのアプローチを多く持つこと。そのアプローチ(言葉による説明)の手段が多いほど私たちが実在に近づいているといえる。また、表象しか捉えていない物は一通りにしか説明できない。

試験

七月に行われる試験は全二問。

一問は作文。持ち込みは不可。授業で与えられたテーマに関してあらかじめ構成し、試験時間内にそれを紙面に再構成する。

一問は授業で聞いた言葉を説明する単問形式。10個の小問に分けられている。

内容

正直、この講義録に収められている内容はツッコミ所が満載で、「いや、それは無いだろ常識的に考えて」みたいな所も大いに存在する。そのあたりは、試験本番の第一問の作文で大いに教授批判に走るのもいいだろうし、twitter や mixi などの SNS でドヤ顔をしながら批判するのもいいかもしれない。

予め言っておきたいが、このシケプリには授業内容に適宜補足しているが、私の思想は一切入っていない。批判は私にしないほしい。

1 体験の私的性格

体験の私的性格とは、クオリア(感覚質)¹の違いである。(クオリアとは、対象を認識した際の「感じ」。例えば「りんごの赤い感じ」や「空の青い感じ」の「感じ」といったこと。)²

ここで一つ疑問が浮上する。つまり、「A君が捉えるクオリアとBさんが捉えるクオリアは一致しているか、あるいは一致しうるか。」ということだ。他者のクオリアが「どうであるか」は原理的に調べることができない。それは、クオリアが脳の信号だけではなく「感覚それ自体」を指しているからである。

クオリアが一致しないことで問題は生じないか。
これは身近な例に還元してみればわかる。

例えばA君には対象 α が色aとして見える。
Bさんには対象 α が色bとして見える。
それでも両者はcという色の名前で合意している。³
その具体例は右の通り。



A君は中央の対象を左のように、Bさんは中央の対象を右のように認識しているとする。しかし両者は中央の対象の色を「赤」という色の名前で合意している。

ここからわかることは「自己の体験は決して他者とは共有されない」ということである。だから私たちは他者から体験を言語で習うことができるが、体験が「どのようなものであるか」を他者から学ぶことは決して無い。

ウィトゲンシュタインの言う「言語が見せる夢」がある。

私たちはみんな言語を駒としたゲームに参加している。つまり上図のような合意が成立しているのだ。そのとき私たちは体験を共有しているという「夢」を見る。それはあくまでも言語によって「思い込み」でしかない。⁴

だから、人間は生まれてから死ぬまで一度たりとも他人と体験を共有することのできない、本性的に孤独な存在であるのだ。

¹ クオリアは身近な概念だが、科学的にはうまく扱えない。これを「クオリア問題」という。

² 肉眼でみた色が正しい色と言えるか、という議論がある。例えば、私たちは「空は青い」という「事実」を共有しているが、これは客観的な事実ではなく、「人間には空が青く見える」という事実を言い換えたものにほかならない。ここから、物の客観的性質を言い表すことが出来ないことがわかる。これが知覚と性質の断絶である。知覚から世界の構造をとらえようとする、必ず破綻をきたす。

³ 色と形はどちらがより根源的か、という議論があるが、このときは色が形よりも根源的である。なぜならば色があるから形がわかるからである。(私たちが対象の形を周囲の色との違いで区別して、その境界を認識するのである。)

⁴ 現実におけるは決して一枚岩のような物ではない。自己と他者との(あるいは他者同士の)知覚経験は比較を絶している、例えばA君がリンゴを見たときにそれが「赤い」ものだとする保証はない。そのため、「赤いリンゴが見える」という近く経験は「赤い」という言葉とA君のクオリアとに分離している。

たとえ B さんが A 君のクオリアを認識できたとしても、それは B さんによる「A 君のクオリア」のクオリアであり、A 君のクオリアを把握したことにはならない。⁵

2 デカルト

◎Cogito ergo sum(我思う、故に我あり)

Cogito ergo sum と近代科学には相関関係がある。

著作『省察』から見る。

この著作は、デカルトが六日間にかけて、確固たる学問の基礎を作り上げるためにあらゆるものを疑ってみる(方法的懐疑)を行ったことが記されている著作である。⁶

夢を見る、とは本来ことばの使い方としては正しくない。なぜなら夢とは原理的に、「夢から覚めたとき」にそれまでの体験が夢であったと認識されるからである。

そこでデカルトは考えた。

「夢がそのような性質を持っているのならば、現在が『夢』であると判断できる確実な根拠は無いのではないか。」

つまり、これから今まで現実と「思い込んで」きた物が一瞬にして「夢であった」と醒めてしまわない(夢が外的に破損されない)と判断できる根拠は何も無いということだ。身近なものからあらゆる物は不確かでしかない。

◎ 「桶の中の脳」

このような議論を行った哲学者にパトナムという人物がいる。彼は「桶の中の脳」という議論を行ったことで知られる。

例えば、私たちが脳以外の器官をすべて失ってしまったが、医学が進歩しており、脳だけの生存が可能になっていたとしよう。脳は電気信号により感覚を捉えるので、脳にカメラやマイク、あとは味覚を電気信号に変える機械をつなぐ。すると脳はカメラに映った外の世界を認識し、音を聞き、物を味わうことができるのではないか。

⁵ x を認識対象、写像(関数)A を A 君が x を認識した脳内の像、写像 B を B さんが x を認識のした脳内の像とすれば、B さんが捉えたのは写像 B(A(x))であって、A(x)を直接に捉えた物ではない。こうした問題は G. Berkeley『視覚新論』や R. Descartes『省察』でも触れられる。

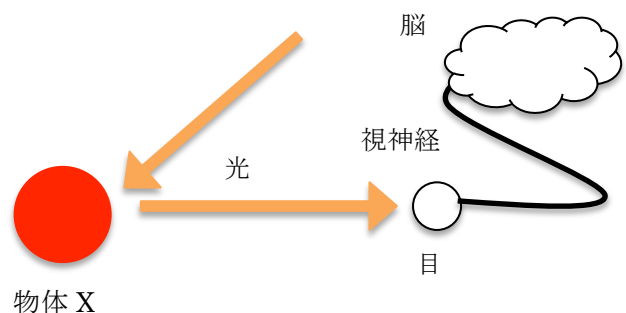
⁶ この著作『省察』におさめられている「第一省察」には「一生に一度は、すべてを根底から覆すために疑ってみて(方法的懐疑)、最初の基礎から新たに始めなければならない。」といったような言葉がある。ここにはデカルト自身が多くの偽なるもの、疑わしきものを真として受け入れてきたという、自分の知的な不誠実さへの気付きが読み取れる。ここからデカルトは様々なものを疑い、確固たる真理(デカルトはそれを Cogito=「考える自己」とした)のみを基礎とする哲学を打ち立てる。

ここで語られるのは、「人間は脳さえあればあらゆる体験ができるのではないか。」ということ。これは裏返せば、いかなる体験も人の手によって作り出すことができるので、人間の体験という物すべてが真であると断言することは決してできないのだ。

◎ 物が離れて見えるのは何故か？

私たちは物体を認識するとき、自分から「どれだけ離れているか」ということもあわせて認識している。これは、物体とその周囲の環境をともに認識しているから当然である、と考えることができるかもしれない。

そもそも知覚とは、光が物体により反射し、それが目によって捉えられ、視神経を通して脳に伝達されるからである。「見えた」と感ずるのは、目によって捉えられた刺激が脳に伝わって初めておこることであって、それ以前に視覚は生じ得ない。



ここから、視覚は「脳の内部」でおこっている光景であると言えるのだ。

つまり、A 君が物体 X を捉えるときには、物体 X およびその周囲の環境などすべての視覚的認識は脳内の処理によって行われている。身体の外側で視覚的認識は起こりえないのだ。⁷

脳内で認識される対象が離れて見えるのはどうしてだろうか、というのはこういうことに議論の根底がある。

◎ Cogito ergo sum 再考

私たちが A を疑うとき、その「疑う」は取り除くことができない。例えば『A は偽である』というものを疑う」というとき、「A は偽である」という志向的内容は必要となるが、それ自体の真偽は必要とならない。つまり取り除くことができる。しかし、「疑う」という行為自体を取り去ることはできない。「疑う」ということ自体を疑うことはできない。⁸これがデカルトの「Cogito ergo sum」である。

例えば「自分が存在しない」と考えるには「自分が存在しない」と考える自分が必要である。⁹

自己存在の根拠は「思う自我」であるが、その「思う自我」は瞬間的存在でしかない。刹那滅¹⁰的な自己存在である。これはコマ撮りになった時間と同様に不連続な自己存在空間があることになる。

ではなぜ「私」にしか言及しない「Cogito ergo sum」が大きな力を持つのだろうか。ここでは「心」

⁷ 同様に音なども、経験未然では情報にはならず、身体で捉えられてはじめて情報となる。

⁸ 「～が聞こえる」や「～が見える」といった認識も「～が聞こえると思う」、「～が見えると思う」というような I think that～と同様の構造をしている。ここには、考えることには考えることの存在が含まれている。つまり、思考と存在の同一性が見られる。

⁹ 原理的に自己矛盾である。

¹⁰ すべての存在が生成した瞬間に消滅すること。その一瞬一瞬がすべて別の物になっているという考え方のことである。

や「私」の記号化が行われているのだ。「私」が記号的に捉えられるということは同時に世界をも記号的に捉えるということである。知覚が、知覚対象が何であるかが分かればよいので、知覚対象が知覚そのものに似ている必要は無い、というのがデカルトの議論である。認識対象そのものの差異が、認識の差異となって現れると述べている。

世界全体を記号として捉えるということは、私たちの知覚はその記号の「表現」するところのものであることになる。¹¹

デカルト以前には、認識とは「私たちに知覚されるように世界は存在する」と言われたように、私たちの知覚と、外界の知覚対象は似ていると考えられていた。¹²例えばヒュームは、「ある二つの事物が同一であると思うとき、それらは完全に同一のものであるというよりも、むしろよく類似¹³しているものである。」と述べている。¹⁴しかし、この考えによれば、「観念が事物でないものをあたかも事物であるかのように表象する」ところに生じる質料的虚偽の問題は解決されない。これには、温度感覚を例にとろう。「冷たい」という感覚は「冷たさ」という積極的な感覚があるのではなく、「熱い」という感覚が欠如しているとも考えられる。また片手を温めて、片手を冷やした後と同じ温度の水にそれぞれの手を入れると、左右両手で感じ方は異なる。感覚とはこのように相対的な部分も持つ。つまり、身体と外界が感覚を作り上げているのだ。外界の客観的記述は困難、ないしは不可能である。ここからデカルトは素朴实在論を批判した。これに対してデカルトは、こうした質料的虚偽を避けるために感覚の観念が何かを表現していると主張した。¹⁵

ここでデカルトの『省察』に収められた「蜜蝋の議論」を見てみよう。

蜜蝋を火に近づけるとドロドロに溶けてしまう。

それ以前の姿とその後の姿をして同じものだとどこで言えるのか。

どちらも記号であり、広がりを持った物体でしかない。

ここで示唆されていることは、「感覚する事は、考える事に他ならない」ということ。感覚の中に思考を内在させてしまったのだ。

そこでデカルトが新たに導入した認識方法を見てみよう。

¹¹ 同様の議論を言語に対して行った言語学者にソシュールがいる。彼が言うには音価の差異があると分かればそれは記号としての役割を担うということ。そのため、言葉を聞いてその指示対象が分かればよいので、言葉そのものが言葉の指示対象に似ている必要はなくなる。(例えば、「赤い」という言葉は赤くない。)これが記号としての言葉である。

¹² このような立場を素朴实在論という。デカルトによる批判の対象となった考え方で、「見えている通りに外界が存在しているといったように、外界が自らの知覚通りに存在している」と認識する立場である。彼らは「似像モデル」によって私たちの知覚を説明する。つまり、Aを見れば、それが表現しているA'が分かり、A'を見ればそれを表現しているAがわかるとうこと。

¹³ 似像説を体系的に展開した思想家にルクレティウスがいる。彼は『事物の本性について』で視覚認識を「ものの表面が薄く剥がれて目に飛び込む」ために生じると述べている。これは世界の秩序をそのまま理解しているという意味で、素朴实在論の先駆となっている。これによれば、人間が視覚によって距離、明暗を判断できるのは剥がれた表面が押してくる空気の量や清濁によっているという。(当時暗さは空気の汚れとして解釈されていた。)これに対する批判は現代科学によっても完全には成し得ない。

¹⁴ 一度視野から離れた物質が再び視野に現れたとき、如何にしてこれらの物質の同一性は保たれるのか、という問題があるが、ヒュームによれば、人間の判断の基準は類似性であるので、人間の判断を加えることでそれらの同一性を脳内で構築しているという。バークリーが「存在するとは知覚されることである」と述べたように、私たちは事物の存在を感覚に頼っているところが大きい。

¹⁵ これがデカルトの言う reality objective=「表現的实在性」である。訳者によってこの翻訳は異なる。

◎ 第六省察

デカルトは第六省察において、心身問題¹⁶に触れている。

かつて身体は、外界と認識の類似性を保つための無垢な入れ物と考えられていた。しかし、デカルトは自身で生み出した表現的実在性の考え方をもとに考え、その類似性を保つ必要は無いとした。そのため彼は、身体とは物質的一要素と考えた。このとき、人間の身体が機械であっても問題はない。

手や足がないのに、その位置に痛みや刺激を感じる、という問題に対してデカルトは、「身体の各地に神経が張り巡らされて脳に繋がっている。ある箇所に刺激があると脳を感じる。つまり痛みの原因は脳にある。身体の断絶が起こったとき、例えば今は断絶してしまった足につながっていた神経が刺激されると脳はあたかも、今は断絶した足に刺激があったと感じる。」といったように説明している。このようにデカルトは、「感覚の本質は脳にある原因によって表現されたもの」と考えた。感覚する原因があるのは脳だが、感覚される事物は原因が身体の外部にあるように表現されている。この表現システムをデカルトは「心(精神)」と考えた。

赤ん坊にとっては「快」「不快」というのが区別できる感覚¹⁷である。身体の認識なし、快と不快という認識だけで赤ん坊は世界と関わっている。デカルトはこれが感情＝記号であるという根拠としている。こうした感情の理解＝表現は、「不快」¹⁸によって有りうるダメージを我々にさけるように促す。

◎ 神の存在証明

イマヌエル＝カントによって、神の存在証明は以下の三通りに分類される。

1. 目的論的証明
2. 宇宙論的証明
3. 存在論的証明

1は世界的设计者としての神を、2は世界の第一原因(因果関係の根源)としての神を、3では概念から存在を導くものとしての神が想定されている。デカルトによる証明は3の存在論的証明であると分類されている。

・ 目的論的証明

大文字の **Designer** としての神の存在が前提となる。

世界にある物体はある目的のために作られている。世界は **Designer** の箱庭として考えられる。

二つの例を挙げて考えてみよう。

まず一つ目。たくさんの基石を投げる。あるときは乱雑に基石が散らばった。またあるときは基石が

¹⁶ 哲学における問題の一つで、人間の身体と精神の関係について問うものである。

¹⁷ ラカンは赤ん坊の、自己と分離した身体意識がやがて自己に結合される段階を「鏡像段階」と呼んだ。

¹⁸ 不快な感情は精神と身体が混じり合うことによって生成されると説明された。これは生きるために必要な感覚であり、デカルトはこれを「自然の教え」と述べた。

ハートをかたどった。一定の空間以上に石が散らばらないようにしているとすると、両者ともおこる確率は当然同じはずである。しかし、その前提があるにも関わらず、私たちは後者の状態に意味を見いだそうとする。

もう一つ。ある日道を歩いていると、石につまずき、100円玉を溝に落とし、傘を持っていないのに雨に降られた。

どちらも確率的には「十分にあり得ること」であるが、私たちはこうした偶然に Designer の存在を疑ってしまう。カントの『判断力批判』には、「美しいものは偶然にはできない。何か設計者がいる」との旨が述べられている。つまり、こうした「奇跡的なもの」の背後に神が存在する、と述べられているのだ。

・ 宇宙論的証明

これは、神の存在を因果関係によって証明しようというものだ。

例えば我々の系譜をたどっていくと、祖先までそれは途切れることはない。つまり、「なぜ存在するか」は因果関係を遡ることで理解できるのだ。¹⁹

そもそもなぜ「何か」は存在するのか。存在する必要性はどこにあったのか。こうした疑問に神の存在を持ち出すのが宇宙論的証明である。物事を極限にまで押し進めた思考によって生まれたのがこの証明だ。またこの場合、宇宙が神によって創造された「特異点」以前はどうなっていたか、さらには特異点以前、以後に宇宙が創造されていた場合は時間がどうなっていたのか、などという疑問も浮上する。

・ 存在論的証明

アンセルムスの著作、『プロスロギオン』の第二章におさめられた証明が有名である。まずはその証明を見てみよう。²⁰

[アンセルムスによる神の存在証明]²¹

神の定義：それより偉大なものが考えられ得ないところのもの。

この「それより偉大なものが考えられ得ないところのもの」という言葉を聞いた者は、その聞いたことを理解する(=intelligit)。そして、彼が理解していることは、彼の理解(する心)のうちにある(=in intellectu)

ところで、この「それより偉大なものが考えられ得ないところのもの」は、理解(する心)の内のみにあるのか、それとも、理解(する心)のうちにあるだけではなく、その外の現実においても(=in re)あるのか、二つのうちどちらかである。

¹⁹ 旧約聖書などにおいては、神は世界を「無から創造」する。

²⁰ ガウニロはこれに対して「概念と存在は本来別の物」として言葉から存在は導きだすことは出来ないという反論を行った。

²¹ この証明に関して、デカルト、スピノザ、ヘーゲルが賛同したことに対し、カント、ヒュームらが反対した。また、ガウニロという人物がこの証明に対して反論したが、アンセルムスはそれに対する返答も行っている。

もし前者であれば、それは、理解(する心)の外の存在を書いている分だけ偉大さが少ない者になるから²²、それより偉大なものが考えられることになり、「それより偉大なものが考えられ得ないところのもの」と矛盾する。したがって、後者の場合しか残らない。

つまり「それより偉大なものが考えられ得ないところのもの」が、理解(する心)のうちにあることが認められた以上、それは、その定義からして、理解(する心)の内だけにあることはできず、その外に、すなわち現実存在する。つまり、神は現実存在する。

この証明は、人間のこころの働きを利用したものである。「否定の比較級」というテクニックを用いることによって、「無限なもの」を有限の側から捉えることができたのだ。

◎ 外界の存在証明……私の「内」と「外」という区別は自明か。

私たち人間の「内側」はいったいどこにあるのだろうか。皮膚の下側、というのならば、喉から肛門まで続く管は人間の内側か、外側か。また、マイクロレベルで見ると、私たちの体は宇宙線を通すようにスカスカである。私たちの「内」と「外」との関係は決して自明ではないのだ。

それでは私たちの心はいったいどこにあるのか。これは文化によって解釈が異なっている。心を何か質料を持ったものだと考えている文化もあれば、体のどこかに延長なく潜んでいると考えているような文化もある。²³

3 「アキレスと亀」と時間

有名なゼノンのパラドクスで有名な「アキレスと亀」問題について触れよう。

ある日アキレスは亀と競争することになった。しかし、アキレスはあまりにも俊足であったため、亀に対して譲歩することとなった。アキレスは亀より後ろの地点から出発する。

すると、アキレスがある時点で亀のいた地点にたどり着いたとき、亀はアキレスよりも前の、ある地点にいる。アキレスがその地点にたどり着いた時点で亀はまたアキレスよりも前の、ある地点にいる。

これでは俊足で有名なアキレスはいつまでかかっても亀に追いつくことができない。

この「アキレスと亀」の議論は一部も間違っていない。しかし俊足のアキレスが亀に追いつけないはずがない。これはどうしてだろうか。

²² 神=最高完全者が存在しないことになると、「存在する」という性質を欠くことになり、それは完全ではなくなる、ということ。

²³ 実際、古代から中世にかけて人間の魂は自然の一部、つまり空間的移動を行う質と量を持った物体として理解されていた。

こういう人がいるかもしれない。「速度を距離と時間から定義していれば問題なくアキレスは亀を追い越すことができる。」と。しかし、今回のゼノンのパラドクスにおいては定義されているのが「地点」と「時点」という語のみなのであって、時間や距離そのものは定義されていないのだ。

このパラドクスは、映画のような断続性が言葉によって表現されているのだ。

断続という言葉聞いて一つの疑問が浮かび上がる。

「時間の進む速さとは？」「固有の時間の存在とは？」

時間の進む速さは確固として決定することはできない。例えば秒針の進む速度を時間の進む速度として設定すると、短針や長針が文句を言うのではないだろうか。かといって短針の速度を時間の進む速度としたのなら非常に遅いものになってしまう。

また、物体が滑らかに動作していたとしても、映画のコマ撮りの用に表現することで断続的に表現することもできる。

そこでまた疑問が浮かぶ。

「不連続な運動空間の狭間はいったいどのようになっているのか。」

これはこれからの講義で明らかにされていく。(と思う。)